

巻 頭 言

本誌「ヒューマンサイエンス」は、神戸女学院大学大学院人間科学研究科の教員、大学院生などの研究を発表する場として、意欲的な論文、研究ノートなどが掲載され、読みごたえのあるものになっている。人間科学研究科には人間科学専攻という1専攻のもとに臨床心理学分野、人間行動学分野、環境科学分野、健康科学分野の4分野があり、文系、理系を超えて、互いの研究を発表しあい、議論する「人間科学合同演習」という必修授業がある。違う分野の人にもわかるように発表することで、多様な視点を持ち試行錯誤しながら考える習慣をつけている。そのために、本誌の中にも、文系理系にまたがる様々な論文が掲載されているのである。

ところで、研究倫理については、様々な大学、大学院で規程を作り、研究倫理審査委員会を作り、審査をしているのではないだろうか。教員自身もコンプライアンスという言葉で、会社や大学などの組織でも、研修会が開かれていることと思う。本学も文科省の指導に従い、年に一度はコンプライアンス研修を全教員の集まる全学教授会のメンバーを集めて開催している。大学なので、研究費の不正使用の話しとかが中心であるが、毎年やると同じような話になり、しかも、理解度チェックや聞きましたということを証明するサインをさせるという徹底ぶりである。あまり、心地いいものではない。しかし、国立大学などでも研究を継続するために、外部資金をたくさん取ってこないと研究が進まないという実情があるようである。写真の明度を利用したデータの改竄等の話題をテレビで見て、多くの研究員や院生を抱えた所ほど、少しずつ倫理意識が甘くなるとフラッと一線を越えかねないかと、他人事ながら背筋が凍る思いであった。資金を自分で取ってくるとなると、教員は個人商店の社長のようになり、資金繰りばかり考えなくてはならなくなる。私も、ある国立大学の学生相談のカウンセラーをやっていた時、毎日、終電まで研究をして休みは日曜日だけとか、研究室でコンパをしても終わってからまた研究室という話を院生から聞いたり、無理をし続けた教員が病気になったとか亡くなったという話もあり、特に先端分野での競争の激しさを感じる体験をした。

研究には、実験し続けることで進む分野もあれば、年に一度咲く花の研究や野外の長期のフィールドワーク、地道な文献学のようなものもある。同じように迅速な結果を求め続けていては、研究が先細り、教員の心身の健康にも悪影響が出る。大学を始め教育、研究への投資は、未来への投資である。そのような視点に立ち返らないと、この国の将来も先細っていくだろう。為政者の慧眼を望むものである。

小林 哲郎
(人間科学研究科長)